

(60)

朝鮮、台湾、樺太、南洋群島人口、技能比較

I-0546

0482

昭和十一年四月調

朝鮮、臺灣、樺太、南洋群島人口狀態比較

管理局地方課

I-0546

0483

- 一、 總人口・増加數・増加割合
- 二、 世帶數・増加數・増加割合。一世帯平均人員
- 三、 人口密度・性別。性別の割合
- 四、 朝鮮に於ける民。國籍別人口
- 五、 臺灣に於ける民。國籍別人口
- 六、 樺太に於ける民。國籍別人口
- 七、 南洋群島に於ける民。國籍別人口
- 八、 朝鮮人現在地別人口
- 九、 臺灣人現在地別人口

朝鮮、臺灣、樺太、南洋群島人口状態比較（末尾比較表参照）

一、本調査は主として昭和十年十月一日國勢調査の結果に基づく

二、本調査中の人口其の他の數字は各年十月一日現在とす

一、總人口・増加數・増加割合

總人口に付ては昭和十年は朝鮮に於て二千二百八十九萬八千六百九十五人、臺灣に於て五百二十一萬二千七百十九人、樺太に於て三十三萬一千九百四十九人、南洋群島に於て十萬二千二百三十八人である。

五年前の昭和五年には朝鮮に於て二千百五萬八千三百五人、臺灣に於て四百五十九萬二千五百三十七人、樺太に於て二十九萬五千九百九十六人、南洋群島に於て六萬九千六百二十六人で、十年前の大正十四年には朝鮮に於て一千九百五十二萬二千九百四十五人、臺灣に於て三百九十九萬三千四百八十八人、樺太に於て二十萬三千七百五十四人、南洋群島に於て五萬六千二百九十四人である。

1

更に十五年前の大正九年には朝鮮に於て一千七百二十六萬四千百十九人、臺灣に於て三百六十五萬五千三百八十八人、樺太に於て十萬五千八百九十九人、南洋群島に於て五萬二千二百二十二人である。

以上に依つて其の増加數を見れば、昭和五年より昭和十年に至る五ヶ年間は朝鮮に於て百八十四萬三千九十九人、臺灣に於ては六十二萬八千八百八十二人、樺太に於ては三萬六千七百五十三人、南洋群島に於ては三萬二千六百十二人の増加である。大正十四年より昭和十年に至る十ヶ年間の増加數は朝鮮に於て三百三十七萬五千七百五十五人、臺灣に於て百二十一萬九千三百一十一人、樺太に於て十二萬八千九百九十五人、南洋群島に於て四萬五千九百四十四人を示し、更に大正九年より昭和十年に至る十五ヶ年間は朝鮮に於て五百六十三萬四千五百七十六人、臺灣に於て百五十五萬七千四百一十一人、樺太に於て二十二萬六千五百五十人、南洋群島に於て五萬十六人の増加を示してゐる。故に十五ヶ年間に於ける一年平均増加數は朝鮮に於て三十七萬五千六

百三十八人、臺灣に於て十萬三千八百二十七人、樺太に於て一萬五千七十人、南洋群島に於て三千三百三十四人となる。

次に増加の割合を見るに五年前の昭和五年よりすれば朝鮮に於て八・七%、臺灣に於て一三・七%、樺太に於て一二・五%、南洋群島に於て四六・八%。十年前の大正十四年よりすれば朝鮮に於て一六・〇%、臺灣に於て二六・五%、樺太に於て四三・七%、南洋群島に於て六五・九%。十五年前の大正九年よりすれば朝鮮に於て二七・〇%、臺灣に於て三三・九%、樺太に於て七六・七%、南洋群島に於て七三・二%の増加である。從て十五ヶ年間に於ける一年平均増加割合は朝鮮に於ては一・八%、臺灣に於ては二・三%、樺太に於ては五・一%、南洋群島に於ては四・九%となる故に率に於ては樺太が最も高率を示し次で南洋群島、臺灣、朝鮮の順序となる。

2 二世帶數・増加數・増加割合・一世帶平均人員

世帶數に付ては昭和十年は朝鮮に於て四百二十九萬七千八百三、臺灣に於て八十九萬八千六百四十五、樺太に於て六萬五千五百四十二。五年前の昭和五年には朝鮮に於て三百九十八萬五千九百五十三、臺灣に於て八十萬八千四百六十一、樺太に於て五萬九千八百七十四である。

其の増加數は朝鮮に於て三十一萬一千八百五十、臺灣に於て九萬百八十四、樺太に於て五千六百六十八である。從て其の増加割合は朝鮮に於ては七・八%、臺灣に於ては一・〇%、樺太に於ては九・五%となる故に率に於ては臺灣が最も高率を示し次で樺太、朝鮮の順序となる。尙五ヶ年間に於ける一年平均増加數は朝鮮六萬二千三百七十、臺灣一萬八千三十七、樺太一千百三十三である。

一世帶平均人員は昭和十年は朝鮮五人三分二厘九毛、臺灣五人七分八厘九毛、樺太五人六厘四毛、昭和五年には朝鮮五人二分八厘一毛、臺灣五人六分八厘、樺太四人七分であるから各地域並年々増加の傾向を示してゐる。而て人員は臺灣が一番多く

次に朝鮮、樺太の順序である。

人口密度・性別・性別の割合

昭和十年に於ける人口の密度は一方村に付朝鮮では百四人、臺灣では百四十五人、樺太では九人、南洋群島では四十八人である。

昭和十年に於ける性別は朝鮮では總人口二千二百八十九萬八千六百九十五人中男一千一百六十六萬二千六百四十人女一千一百二十三萬六千五百五十五人、臺灣では總數五百二十一萬二千七百十九人中男二百六十五萬九千九百二十八人女二百五十五萬二千七百九十一人、樺太では總數三十三萬一千九百四十九人中男十八萬六千二百三十一人女十四萬五千七百十八人、南洋群島では總數十萬二千二百三十八人中男五萬七千百二十二女四萬五千百十六人であり、其の割合は女百人に付男は、昭和五年には朝鮮百五人、臺灣百五人、樺太百三十四人、昭和十年には朝鮮百四人、臺灣百四人、樺太百二十八人、南洋群島百二十七人である。之に依つて見れば朝鮮と臺灣は其の

割合を畧同ふし、樺太と南洋群島とが遙に高率を示してゐるか何れの地域も年々男女数の接近してゐることが窺はれる。

四、朝鮮に於ける民・國籍別人口

昭和五年に於ける朝鮮の總人口二千百五萬八千三百五人の内譯は、内地人五十二萬七千十六人、朝鮮人二千四十三萬八千八百八十八人、臺灣人十九人、樺太土人十五人、外國人九萬三千百四十七人。大正九年に於ける總人口一千七百二十六萬四千百十九人の内譯は内地人三十四萬六千四百九十六人、朝鮮人一千六百八十九萬一千二百八十九人、臺灣人、樺太土人は存在せず、外國人二萬六千三百三十四人である。

其の十ヶ年間に於ける増加數は總數に於て三百七十九萬四千八百八十六人、内地人は内地人十八萬五百二十人、朝鮮人三百五十四萬六千八百十九人、臺灣人十九人、樺太土人十五人、外國人六萬六千八百十三人である。尙増加率に付ては別表參照。

五、臺灣に於ける民・國籍別人口

昭和五年に於ける臺灣の總人口四百五十九萬二千五百三十七人の内譯は、内地人十二萬八千二百八十一人、朝鮮人八百九十八人、臺灣人四百三十一人、三千六百八十一人、外國人四萬九千六百七十七人、大正九年に於ける總人口三百六十五萬五千三百八人の内譯は内地人十六萬四千二百六十六人、朝鮮人六十九人、臺灣人三百四十六萬六千五百七十七人、外國人二萬四千四百六十六人である。

其の十ヶ年間に於ける増加数は總數に於て九十三萬七千二百二十九人、内譯は内地人六萬四千十五人、朝鮮人八百二十九人、臺灣人八十四萬七千七百七十四人、外國人二萬五千二百一十一人である。尙増加率に付ては別表參照。

六 樺太に於ける民・國籍別人口

昭和五年に於ける樺太の總人口二十九萬五千九百九十六人の内譯は内地人二十八萬四千九百九十八人、朝鮮人八千三百一十一人、樺太土人二千六百六十四人、臺灣人五人、外國人五百二十八人。大正九年に於ける總人口十萬五千八百九十九人の内譯は内地人十

4

萬二千八百四十一人、朝鮮人九百三十四人、樺太土人千九百五十四人、臺灣人は存在せず、外國人百七十人である。

其の十ヶ年間に於ける増加数は總數に於て十八萬九千二百九十七人、内譯は内地人十八萬一千三百五十七人、朝鮮人七千三百六十七人、樺太土人二百十人、臺灣人五人、外國人三百五十八人である。尙増加率に付ては別表參照。

七 南洋群島に於ける民・國籍別人口

昭和五年に於ける南洋群島の總人口六萬九千六百二十六人の内譯は内地人一萬九千六百二十九人、朝鮮人百九十八人、南洋土人四萬九千六百九十五人、外國人九十六人、臺灣人一人、樺太土人七人。大正九年に於ける總人口五萬二千二百二十二人の内譯は内地人三千四百三人、朝鮮人二百六十八人、南洋土人四萬八千五百五人、外國人四十六人である。

其の十ヶ年間に於ける増減数は總數に於て一萬七千四百四人の増加にして、其の内

朝鮮、臺灣、樺太、南洋群島人口状態比較（追加）

昭和九年末（南洋群島は昭和十年四月一日）に於ける各地域民。朝鮮別人口（推定）

朝鮮に於ける総人口二千百十二萬五千八百二十七人の内譯は、内地人五十六萬一千三百八十四人、臺灣人六人、朝鮮人二千五十一萬三千八百四人、外國人五萬六百三十九人である。

臺灣に於ける総人口五百十九萬四千九百八十人の内譯は、内地人二十六萬二千九百六十四人、朝鮮人千三百十六人、臺灣人四百八十八萬二千二百八十八人（此の中生番十四萬八千四百七十二人を含む）外國人は中華民國人四萬八千九百九十三人、其の他の外國人二百十九人である。

樺太に於ける総人口三十一萬三千百三十人の内譯は、内地人三十萬四千九百九十五人、朝鮮人五千八百七十八人、土人千九百十八人、外國人二百九十九人である。

南洋群島に於ける総人口九萬八千五百六十五人の内譯は、内地人四萬七千四百三十二人、朝鮮人、臺灣人、樺太土人併せて四百七十一人、島民五萬一千五十六人、外國人九十七人である。（別表参照）

昭和九年末（南洋群島は昭和十年四月一日）に於ける
各地域民・国籍別人口表（推定）

朝鮮		樺太	
内地人	二、一二五、八二七	内地人	三一三、一三〇
臺灣人	五六一、三八四	朝鮮人	三〇四、九九五
朝鮮人	六	土人	五八七八
外國人	二〇、五一三、八〇四	外國人	一、九一八
臺灣	五〇、六三九	南洋群島	二九九
内地人	五、一九四、九八〇	内地人	九八、五六五
朝鮮人	二六三、九六四	朝鮮、臺灣、樺太土人	四七四、一二
臺灣人	一、三一六	島民	四七一
内地人	四八八、二二八	外國人	五一、〇五六
外國人	四八、四一二		九七
内地人	四八、四一二		
外國人	四八、四一二		

韓は内地人一萬六千二百二十六人の増加、朝鮮人は七十人の減少、南洋土人千百九十人、外國人五十人、臺灣人一人、樺太土人七人ノ各増加である。増加率に付ては別表参照。

八、朝鮮人現在地別人口

昭和五年に於ける朝鮮人數二千四百四十九萬二千二百八十三人の現在地別人口は、内地に四十一萬九千九百人、朝鮮に二千四十三萬八千八百八十八人、臺灣に八百九十八人、樺太に八千三百一人、關東州及鐵道附屬地に一萬八千三百二人、南洋群島に百九十八人、外國に六十萬七千四百六十七人であり、大正九年に於ける朝鮮人數一千六百九十九萬八千二百八十一人のそれは、内地に四萬七百五十五人、朝鮮に一千六百八十九萬一千二百八十八人、臺灣に六十九人、樺太に九百三十四人、關東州及鐵道附屬地に五千七百八十一人、南洋群島に二百六十八人、外國に五萬九千八百八十五人である。

5

各地域に於ける十ヶ年間の増加数は總數に於て四百四十九萬四千二人、内地は内地に於ては三十七萬八千二百五十四人、朝鮮に於ては三百五十四萬六千八百十九人、臺灣に於ては八百二十九人、樺太に於ては七千三百六十七人、關東州及鐵道附屬地に於ては一萬二千五百二十一人の各増加、南洋群島に於ては七十人の減少、外國に於ては五十四萬八千二百八十二人の増加である。増加率に付ては別表参照。

九、臺灣人現在地別人口

昭和五年に於ける臺灣人數四百三十二萬七千十三人の現在地別人口は、内地に四千六百一十一人、朝鮮に十九人、臺灣に四百三十一萬三千六百八十一人、樺太に五人、關東州及鐵道附屬地には存在せず、南洋群島に一人、外國に八千六百九十六人であり、大正九年に於ける臺灣人數三百四十七萬二千九百九十八人のそれは、内地に千七百三人、朝鮮には存在せず、臺灣に三百四十六萬六千五百七十七人、樺太には存在せず、關東州及鐵道附屬地に三十七人、南洋群島には存在せず、外國に四千七百五十

一人である。

各地域に於ける十ヶ年間の増加数は總數に於て八十五萬四千十五人、内諺け内津に於ては二千九百八人、朝鮮に於ては十九人、臺灣に於ては八十四萬七千百七十四人、韓太に於ては五人の各増加、關東州及鐵道附屬地に於ては三十七人の減少、南洋群島に於ては一人、外島に於ては三千九百四十五人の各増加である。増加率に付ては別表參照。

一 総人口・増加数・増加割合

地域	総人口				増加数				増加割合			
	昭和 一〇	昭 和 五	大 正 一四	大 正 九	昭和 五 至 昭 和 一〇	昭 和 一〇 至 昭 和 一五	昭 和 一五 至 昭 和 二〇	昭 和 二〇 至 昭 和 二五	昭 和 二五 至 昭 和 三〇	昭 和 三〇 至 昭 和 三五	昭 和 三五 至 昭 和 四〇	昭 和 四〇 至 昭 和 四五
朝鮮	二六九、六九五	二〇五、八三五	九五、三九四	五八、四一九	一、四〇、三九〇	三、五五、五七〇	五、六三、四五六	三、五五、三三八	八・七%	一六・〇%	二七・〇%	一・八%
臺灣	五二二、七一九	四九五、五三七	三九七、三四八	三六五、五三八	二、五八、一八二	三、九三、二一一	五、五五、四一一	一、〇三、八二七	一三・五%	二六・五%	三三・九%	一・三%
樺太	三三、九四九	一九五、一九六	一〇三、五五四	一〇五、八九九	三六、五五三	二八、一九五	二六、〇五〇	一五、〇七〇	一一・五%	四三・七%	六六・六%	五・一%
南洋群島	一〇、二三八	六九、六二六	五六、九四四	五三、三三六	三、六六二	四五、九四四	五、〇一六	三、三三四	四六・八%	六五・九%	七三・三%	四・九%

三、世帯数・増加数・増加割合・一世帯平均人員

地域	昭和一〇年	昭和五年	増加数	増加割合	一年平均増加数	一世帯平均人員
朝鮮	四、二九七、八〇三	三、九八五、九五三	三一、八五〇	七・八%	六二、三七〇	五・三二九
臺灣	八、九八、六四五	八、〇八、四六一	九〇、一八四	一・〇%	一八、〇三七	五・七八九
樺太	六、五五四二	五、九八七四	五、六六八	九・五%	一、一三三	五・〇六四

三、人口密度・性別・性別の割合（昭和十年）

地域	面積（方寸）	人口	總數	男	女	男女の割合（女百に付）
朝鮮	二二〇、七四六・〇四	一、〇四二、三八九、八六五	一、六六二、六四〇	一、二二六、〇五五	一、〇四二、三八九、八六五	一〇四
臺灣	三、五九六・二一	一、四四五	五、二二二、七一九	二、六五九、九二八	二、五五二、七九一	一〇四
樺太	三、六〇八、九七七	九	三、三、九四九	一、八六二、三一一	一、四五七、一八	一〇四
南洋群島	二、一四八、八〇	四八	一〇、二二三八	五、七一二二	四、五一一六	一〇四

四、朝鮮に於ける民・國籍別人口

地域	昭和五年	大正九年	増加数	増加割合
朝鮮	二、一〇五、八三〇	一、七二六、四一一	三、七九四、一八六	二二・一%
内地人	五、二七〇、一六	三、四六四、九六	一、八〇五、二〇	五二・一%
朝鮮人	二〇、四三八、一〇八	一、六八九、二八九	三、五四六、八一九	二一・一%
臺灣人	一九	一	一九	一%
樺太人	一五	一	一五	一%
外國人	九三、一四七	二、六三三、四	六、六八一三	二五・七%

五、臺灣に於ける民・國籍別人口

地域	昭和五年	大正九年	増加数	増加割合
臺灣	四、五九二、五三七	三、六五五、三〇八	九三七、二二九	二五・六%
内地人	二、二八二、八一	一、六四二、六六	六四〇、一五	三九・一%
朝鮮人	八、九八	六九	八二九	一、二〇一%
臺灣人	四、三一三、六八一	三、四六六、五〇七	八四七、一七四	二四・一%
外國人	四、九六七	二、四四六、六	二、五二一一	一〇・三%

六 樺太に於ける民・國籍別人口

	昭和五年	大正九年	増加數	増加率
樺太人	二九五、一九六	一〇五、八九九	一八九、二九七	一七、八八%
内地人	二八四、一九八	一〇三、八四一	一八一、三五七	一七、六三%
朝鮮人	八、三〇一	九、三四	七、三六七	七、八八%
樺太人	二、一六八	一、九五四	二、一〇	一〇、七%
臺灣人	五	一	五	一
外國人	五二八	一七〇	三五八	二一、一%

七 南洋群島に於ける民・國籍別人口

	昭和五年	大正九年	増加數	増加率
南洋人	六九六、二六	五二、二二二	一七四、〇四	三、三三%
内地人	一九六、二九	三、四〇三	一六二、二六	四七、六八%
朝鮮人	一九八	二六八	(一) 七〇	(一) 二、六一%
南洋人	四九六、九五	四八、五〇五	一、一九〇	二、五%
外國人	九六	四六	五〇	一〇、八七%
臺灣人	一	一	一	一
樺太人	七	一	七	一

八 朝鮮人現在地別人口

現在地	昭和五年	大正九年	大正九・昭和五 増加數	増加率
内地	四一九、〇〇九	四〇、七五五	三七八、二五四	九二、八一%
朝鮮	二〇四、三八一〇八	一六八、九一、二八九	三五四、六八一	二一、一%
臺灣	八九八	六九	八二九	一、二〇一、四%
樺太	八、三〇一	九三四	七三六七	七、八七%
關東州及 附屬地	一八三、〇二	五七、八一	一二、五二二	二一、六六%
南洋	一九八	二六八	(一) 七〇	(一) 二、六一%
外國	六〇七、四六七	五九、一八五	五四八、二八二	九二、六四%
計	二、四九三、二八三	一六九、九八二八一	四四九、四〇〇二	二、六四%

九 臺灣人現在地別人口

計	外 國	南 洋	附 屬 地	關 東 州 及 附 屬 地	樺 太	臺 灣	朝 鮮	內 地	現 在 地
四三二七〇一三	八六九六	一	一		五	四三一三六八一	一九	四六一一	昭 和 五 年
三、四七二、九九八	四、七五一	一	三七		一	三、四六六、五〇七	一	一、七〇三	大 正 九 年
八五四〇一五	三、九四五	一	(一) 三七		五	八四七一七四	一九	二、九〇八	增 大 正 九 年 昭 和 五 年 數
二五%	八三%	一〇〇%	一		一	二四・四%	一	一七・一%	增 加 率

法第四一七七號

昭和十一年十二月十八日

臺灣總督官房法務課長 山 本 眞 平

河 合 理 事 官 殿

司法官定年制ニ關スル件

電報ニテ御照會ニ係ル司法官定年制ニ關スル資料別紙ノ通り及添付候
間可然御計相成度

定年制施行不要ナル理由

本島ニハ司法官試補ノ制度ナク判官、檢察官ハ専ラ内地判檢事中ヨリ任用シ來リタル關係上内地轉出比較的容易ニ行ハレ又氣候、風土ノ影響ニ因リ永ク其ノ職ニ止マル者尠ク然ラザル者ト雖モ官吏道德ヲ重ンジ適當ノ時期ニ退職シテ後進ニ途ヲ拓ク慣例アリ過去五ヶ年間ニ於ケル内地轉出者竝ニ退職者ヲ調査スルニ別表ノ通りニシテ定員少數ナル本島司法官ノ人事行政上寔ニ其ノ運用ノ妙ヲ得タリト言フヘク然ルニ今定年制ノ施行アルトキハ多年ニ亘リ折角圓滑ニ行ハレ來リタル人事行政ノ運用ニ膠着シ生ジ内地ニ於テモ定年制施行ノ結果實際上諸種ノ支障ヲ來シツツアル現状ニ當ルトキハ敢テ本島ニ之ガ施行ノ要無之モノト思料セラル、然レ共中央ニ於テ内地地統一ノ方針確定セルニ於テハ強テ反對ヲ主張セズ。

自昭和七年判官、檢察官内勤轉出者
至同十一年

昭和七年	十月一日	下瀬芳太郎	四一	任檢察判官ヨリ
同	七月十五日	武松久吉	四八	任檢察判官ヨリ
同	七月三十日	武井辰磨	四〇	同
昭和八年	二月一日	鷺海隆	四〇	任判事判官ヨリ
同	十二月十六日	太田周作	四九	同
同	五月五日	石井謙爾	四三	任檢察判官ヨリ
昭和九年	五月十六日	讃井健	四四	任判事判官ヨリ
同	五月二十三日	岡本安治	三二	同
同	十一月二十八日	高柳急	三六	同

昭和十年	十一月十三日	竹内佐太郎	六一	任檢察判官ヨリ
昭和十年	七月三十一日	甲村登音夫	三五	任檢察判官ヨリ
昭和十一年	十一月十八日	勝山内匠	四三	任檢察判官ヨリ

自昭和七年
至同十一年 判官退職調

退職年月日	氏名	年齢
昭和七年三月十日	松田 宏一	四三
同三月十六日	石崎 皆市郎	五二
同六月十三日	金子 保次郎	五五
昭和八年五月五日	小山 準太	三一
同七月二十九日	田中 吉雄	五八
同七月三十一日	上田 貞藏	五八
同八月一日	渡邊 里樹	四六
同九月五日	後藤 和佐二	五四

同九月二十五日	永井 敬一郎	四二
昭和九年五月三日	有永 定次郎	四四
同十二月十九日	鈴木 英男	五〇
昭和十年五月十八日	黄炎 生	三二
同六月二十七日	大里 武八郎	六四
同十月三十一日	菅元 生	五一
昭和十一年三月三十日	井上 敏	五五
同十月十二日	花城 長昱	五六

自昭和七年
至同十一年
檢察官退職調

退職年月日	氏名	年齢
昭和七年三月十六日	中山孝一	四六
昭和八年六月十九日	對馬郁之進	五〇
昭和九年ナシ		
昭和十年ナシ		
昭和十一年ナシ		